

六
花

り
つ
か

月刊俳句雑誌

2006

rikka haikukai
designed by masami

9月号

一



山田六甲

秋霖^{しゅうりん}や畳の部屋に寝転んで
芋を煮る匂ひの中に読みふける
一瞬の闇生まれけり稲光
遠ざかる列車の上を稲光
石ひとつづらつく月の川渡る
沢蟹をつまめば蟹の子が散りぬ
神の岩祀^{まつ}れる山や茸^{きのこ}生ゆ
仲秋の杉山訪^とうて来たりけり

逆さまに蛙振らるる芋嵐
名乗りてはすぐ忘らるる月の宴
湯の山の捨て場に月の差しにけり
岩陰に並べる法師蟬の穴
かはほりの秋風に吹き戻さるる
海遙はるか秋冷の中下りけり
雷雲や案山かかし子笑ひて立ちゐたる
しづけさや落鮎過ぎし瀬の磧かわら
をさなげに案山子は眉を濃く引かる
骨酒や雨に近づく風吹ける
秋落暉らつき鳥群れ飛べる地平線
手帳から葉包やくほうひとつ秋灯

喜 蒲

青光る燕つばめや日差し切り込める
たんぼぼの絮わたをしゃぼんのごと吹ける
薄暑かな脚に滑らす絹の夜具
あかんぼの髪かみ梳すきなほす薄暑かな
鯉こいのぼり幟真ん中の鯉逆さなり
薰風くんぷうやまどろむ睫まぶたふるへさせ
藻もの花へ届かざる手を伸べにけり
湯の菖蒲しょうぶひとすぢ抜いて髪上ぐる
長風呂のときをり香る菖蒲かな
水陰かげや赤き金魚のひれたゆむ

蝦夷富士や残雪太く引きみたる

笹村 政子

断崖の祠離れぬ夏つばめ

萱草の海より岬へと咲けり

馬鈴薯の花渡り来る鳥の声

一陣の風となりけり夏つばめ

蝦夷富士の沢に残る残雪を、太い筆書きのように言った力強い表現の主観一元句。それが「太く引きみたる」であり、五月頃の蝦夷富士の残雪をよく表現してあますところがない。蝦夷富士は北海道西部にある円錐状火山で標高1898¹。羊蹄山（ようにていざん）の別名。旧称は後方羊蹄山（しりべし）。作者を知る六甲から言わせれば日々の努力のたまものであり、本来の力がでてきた。

三日月

梶浦玲良子

鴉にの巢おのこけら落しとなりにけり
 三日月かに並つんで腰こを夕涼りみ
 葛藤かの文字つ摺り草そとなりうにけり
 麻酔まより覚めたる土用つ三郎さかな
 はえとりぐも仕切り直しの影かげを連れ

※土用三郎＝夏の土用に入った日から三日月

くちなし

木内美保子

梶く子ちの一日いちだけだけの白しろ極きむ
 繋つがなれて子この枕まくら辺への甲か虫む
 通行つう止と関かん所しよ破はりの道みちをしへ
 水あ馬めのんりぼと紅べ透とけて黒くろぶぶだう
 や青あ空そ跳とねねて雲う跳とねねて

檀木集

荒梅雨

佐原 正子

梅雨晴の息吹満ちたる線路かな
岩風呂に身を伸び伸びと梅雨最中
荒梅雨の音に逆らひ説法会
走り梅雨地に根を張れる巨木杉
雷鳴や耳を裂かむといふ程に

蝉

延川五十昭

初蝉ぞ大葉をつかみ生れける
縁側の小函に残る蝉の殻
坪庭に蝉の穴ある茶席かな
蝉の穴かぞへてからの草むしり
六十路来て声しはがれる酷暑かな

ほぼつき

岩松 八重

しめつぽき香を浴びてをり藤の下
尾の先も蝶捕る構へぶち子猫
どくだみの匂ひにまみれ草むしり
夕やけの夕やけ色をくりだせり
尊敬の的なりほぼつき鳴らしたる

初蟬ぞ大葉をつかみ生れける

延川五十昭

蟬が羽化をするところを観察していたのだろう。およそ蟬が羽化するときには木の枝などが通常なのだろうが、大葉をつかんで羽化を始めたというのは、通常ならざる緊急事態が蟬に起こっていたことになる。その緊張した生命の誕生の場面を「大葉をつかみ」という一言で表現し、作品の格調を上げた。

走り梅雨地に根を張れる巨木杉

佐原 正子

しめつぼき香を浴びてをり藤の下

岩松 八重

紫に垂れる藤の花の息吹が伝わってくる句。その藤の匂いには確かに湿り気を帯びた香りが確かにする。湿り気を帯びた藤の香りは作者の主観であるが、読者の共感（そう言えばそうだよなあというような説得性を持つもの）を喚起するのであるから主観写生として優れていると言える。

蓮池や茅葺の屋根取り囲み

池崎るり子

手花火やをとこのをらぬ訳をふと

いば 智也

神事待つ蚊に好きなだけ血を吸はせ

角田 信子

水底にあめんぼ影を揺らしをり

K O K I A

一向に帰らぬ客や夜の蟬

武田 美雪

こういう客は誰しも体験したこと。病床の正岡子規なら話し相手が長居してくれるのは有り難かったであつたらうが、そろそろ帰って欲しい気持ちを知ってか知らずか、なかなか腰を上げる様子がなく困惑している場面。そこに夜蟬が短く鳴いた。そのことをきつかけに客が長居に気付いてくれないだろうかなどと淡い(甘い)期待をもっている。

暑き日の部屋に無用の品多し

馬場美智子

光りつつ草間に消える大ほたる

松下 幸恵

指先をかすめ飛び交ふ螢かな

松本文一郎

白靴の歩み止めずに悲しき日

三井 孝子

白色というのは、明るいはずなのにどこか悲しみの色という感じがするのは、私の主観ではあるが、辻田克巳・平坂万桑・井神三峽と六甲で淡路島吟行をした折り「秋の航キャビンかなしきまで白し 克巳」(季語は記憶があいまい)と詠まれたからやはり悲しみを持った色なのだろう。(時代を遡ると喪服も白だった) 掲句は白靴を見ながら、つまりうつつむいて黙々と歩き続けている。その行為が決して悲しみを和らげるわけではないのに……。

夜桜やぜんざいまでは食べ切れず

宮森 毅

割れメロン蟻を追ひ出し皮を剥く

物江 昌子

なにもかも揺れておりけり青田風

わかやぎすずめ

青田に吹く風の中に居れば、青田だけでなくそのうちに何もかもが揺れて居るように感じた主観写生。この句の中の言葉には出ていないが、自らの心も揺れていることであろうことは明白。

一息に乾すや両手の石清水
音のみの花火の形の煙来し

筒井八重子
永田 勇

上空に花火の形をした煙が流れてきた。音の聞こえた花火は見えなかつたけれど煙が打ち揚げ花火の形を見せている。丁度煙が上空へ来たとき別の花火が揚がつて煙がはつきりと見えたのだ。が花火は残念ながらピルか何か障害物のため見えない位置にいることになる。「そら！また揚がつた。早く行こうよ。」などと気が逸っている状態を連想させる。

振花の花より視線そらされず
病室の窓より虹の見えにけり
夕餉時泳ぎ疲れし子の覚めず
逆上り少女入道雲を蹴る

中瀬 定子
平居 潜子
黒田 令子
山本ミツ子

逆上がりをしている少女は昔日の作者か。逆上り方を失敗したことよってまるで入道雲（雲の峰）を蹴ったようなかたちである。入道雲と言ったのは蹴られた入道が怒り出すのではないかという込み入った設定（擬人化）も含んでいるのであろうか。逆上がりが下手だった筆者も経験した場面であり懐かしい。

ぬか床に茄子をどち込め鬼婆
あぢさゐの葉に五月雨のはじけたり
とんぼうの間にひをはつ草の先

田尻 勝子
金月 洋子
菊谷 潔

蜻蛉をとんぼうとも言う。蜻蛉が留まろうとすると、草が揺れて留まるタイミングがはずれてしまった。その瞬間をすかさず言い止めたのが良い。

青田風強き日差しに吹きぬけり
わが庭の空蟬あつめ並べおく
七月の雲ためらはすとどまらず
掌に閉ふ蜚静かに灯しけり

金月 律子
三村 昭子
五ヶ瀬川流一
横山 迪子

ほたるがてのひらの中を灯している。静かにというのには蜚はもちろんのこと、蜚を飼っている者の心も蜚の息づかいに同調して静かなのである。

箸置いてせせらぎの音川床料理
ふぞろひの庭のきうりのどつしりと
ゆるやかに盛り上りたる凌霄花
百八の確に挑むや若の花
薄紅の睡蓮ひとつ咲きにけり
立ち寄りてそよ風渡る夏座敷
秋の雨産廃介し士に消ゆ

大上 保子
霜寄恵美子
今本よしえ
松本 蓉子
延川 笙子
森本 密夫
出口 誠

六花集

山田六甲選

筒井八重子

わかやぎすずめ

なにもかも揺れておりけり青田風
沙羅さらかの花落ちゆく日まで咲きにけり
紫陽花や雨の雫を抱き揺るる
カーテンを開く朝や五月雨さみだるる
子鹿来て鳴く声真似て鳴き返す

青田かな友の表情和ませて
青田波色を変へつつ進みけり
早朝の青田の中を走りけり
青田風棚田を白く過ぎにけり
一息に乾すや両手の石清水いwashimizu

永田 勇

天翔あまかける自由の曲線蛍の火
荒梅雨の屋根を貫く夜明け前
青空を突き刺したるやねぢり花
音なりのみの花火の形の煙来し
握る手を握り返せず遠花火